夢の実現

―― 努力は裏切らない

講演録

東京国際大学
女子ソフトボール部
総監督
宇津木妙子
うつぎ・たえこ

1953年(昭和28)埼玉県生まれ。中学でソフトボールを始め、高校卒業後ユニチカに入社。85年現役引退後、日立高崎(現・ビックカメラ)監督を務める。97年(平成9)日本代表の監督に就任し、2000年シドニー五輪銀メダル、04年アテネ五輪で銅メダルを獲得。NPO法人ソフトボール・ドリーム理事長。『努力は裏切らない』ほか著書多数。

日本チームの監督としてシドニーオリンピックで銀メダル、アテネオリンピックで銅メダルを日本にもたらし、ソフトボールを一躍人気スポーツへと導いた宇津木妙子さん。選手たちの目標意識の高め方や最強のチームづくりの極意、勝つために必要なポイントを語ってもらった。

人に負けない自分の一番を探して レギュラーの座を勝ち取る

ソフトボール人生も約50年。振り返ると山あり谷あり、というより、ほとんど谷だけ、壁にぶつかってばかりで、何とかそれを乗り越えようと頑張ってきました。いまはただただ、ソフトボールに出会えたことに感謝しています。

私は埼玉県の川島村(現・比企郡川島町)で生まれ育ちました。5人兄弟の末っ子で、勉強ができなかった私に母はとても厳しかった。私は母にほめてもらいたくて、運動を頑張りました。やがて、中学校でソフトボールと出会い、顧問の先生にこう言われたのです。「ソフトボールを通じて何でもいい、元気1等賞でもいいから一番を目指せ」と。当時、元気やかけっこは誰にも負けませんでしたから、これを生かしてソフトボールで1等賞になろう、そう思って入部したのです。

中学校では県大会優勝を目指し、3年間頑張ってベスト8。高校時代は、インターハイと国体を目指して頑張りました。

高校卒業後、岐阜のユニチカ垂井の実業団チームに入りました。入団前、ユニチカの監督が何度も家に来てくれて、「娘さんは素晴らしい、すぐにレギュラーで使いたい」とスカウトしてくれたのです。私も自分自身を素晴らしい選手だと思っていましたから、反対する父親を説得して許してもらいました。

でも、忘れもしません、昭和47年3月10日。私と一緒に入団する東日本ナンバーワンのピッチャーと二人で東京駅発10時の新幹線を待っていると、顧問の先生が見送りに来てくれ、新幹線のドアが閉まる瞬間にこう言ったんです「宇津木、お前はピッチャーの付録だからな」と。私は付録だったんです。新幹線の中、岐阜羽島までずっとトイレに入って大泣きしました。そのとき自分に言い聞かせたのです、絶対に見返そうと。

しかし、ユニチカに入って高校

のソフトボールと実業団の差を思い知らされました。パワーやスピードが圧倒的に違うのです。一緒に入団したピッチャーはバッティングが上手だったのですぐレギュラーになっていたのですが、やはり私は付録みたいなものだったのです。ボール拾い、バット引き、声出し……そんな日々が続きました。どうしたら先輩に追いつき追い越せるのか――一生懸命練習をしながら、中学の部活の顧問が言ったことを思い出し、「このチームで自分の一番を探そう」と決意。私は〝元気の一番〟を目指すことにしました。

そして、監督に自分をアピールして、ケガをした先輩の代わりにレギュラーの座を獲得。それからは必死でした。与えられたサードのポジションを責任もってやろうと、練習に励みました。当時、私のプレーヤーとしての実力はチームで3番手でした。しかし、引退するまでの十余年間を頑張った結果、日本代表に選ばれ、世界選手権にも出場させていただき、ジュニアのコーチもさせてもらいました。本当にすべての経験をさせてもらったと思います。

選手の特徴や技術を把握し、選手おのおのに目標意識をもたせ、最強チームをつくる

現役引退後、日立高崎ソフトボール部（現・ビックカメラ女子ソフトボール高崎）――3部リーグの最下位のチームから監督の依頼がありました。当時、女性監督はいませんでしたから、やれるかどうか不安でしたが、選手を見たときにこの子たちだったら1部リーグにいける予感がありました。高校時代の先生に相談したら「女が監督なんかやるもんじゃない」と言われ、父に相談したら「監督は社長であり雑用係でなければならないし、選手は監督の背中を見て育つのだから、ソフトボールだけを教えればいいというわけじゃない」と教えられました。そして「3年頑張れ。それで結果が出なければ辞めろ」と言われ、監督になることを決意しました。

就任後、私は選手に「それぞれが自分の中の〝一番〟を探して、1部リーグという目標に向かってチームで頑張っていこう」と伝えました。さらに、選手の家族構成、高校時代の指導法、叱って伸びるのかダメになるのか、技術、体力、メンタル面はどうか、血液型、県民性等を記した個人カードを作成。それに基づいてコンバートしながらチームづくりをしていきました。

やがて、チームは3部から2部、1部へと昇格。やはり練習は裏切らない、どんどん強くなっていったのです。やれば結果は必ずついてくるんだなと実感しました。

1996年（平成8）ソフトボールがアトランタオリンピックの正式種目になり、私はコーチとして初めてのオリンピックに行きました。結果は4位入賞でした。

帰国後は実業団チームに戻り、全日本の優勝を目標に据えました。それだけでなく、私たちはさらにその先の世界を見据えて、海外のチームはどんな練習・戦い方をしているかを知ろうとカナダカップに遠征しました。私は選手たちに、海外選手の試合や練習が自分たちとどう違うかを観察するように、という宿題を与えました。

日本に帰ってミーティングを開き、選手たちが口々に言ったのは、「私たちは常に監督の指示待ちだった」「アメリカの選手は常に準備をし、グラウンドでは軽く練習をすませ、笑顔で試合をしていた」「私たちは普段と同じパワー練習をして試合に臨むので、体力を消耗していた」等々。そこで、それを踏まえて、日々の準備や自発的行動への意識改革を行っていきました。チームはどんどん強くなり、1997年、国内の三つの大会全部で優勝をしたのです。

ちょうどその頃、日本ソフトボール協会から要請があり、日本代表監督に就任しました。

私は、自分のチームを中心に外部選手も加えたチームをつくり、世界選手権に向けて徹底的に練習を始めました。相当厳しい練習だったのに、なぜ選手たちが頑張れたか。それは、私と同じ「ソフトボールをメジャーにしたい。みんなに認

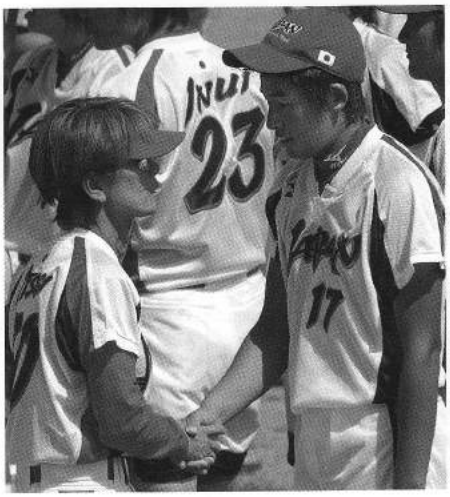
めてもらいたい」という思いがあったからです。そして世界選手権3位に入賞して、シドニーオリンピックの切符を手に入れました。

日々努力を続け、チームで一丸となって念願の勝利を勝ち取る

シドニーに向けて新たにメンバーを選んでチームをつくり、猛練習をスタートさせました。このオリンピックでメダルを取らないと、絶対ソフトボールはメジャースポーツにはなれない、そう覚悟していました。ですから、笑顔が見られるような練習なんて一切なかったです。めちゃめちゃハードな練習をしました。結果、最強のチームができ上がりました。そして、シドニーでは、みんなが練習どおりの試合をやってくれました。1点差だったんです、最後の決勝戦も。

決勝戦の4回表、宇津木麗華のホームランで1点を取り、さあピッチャー交代と思ったのですが……その瞬間、私は体がガタガタ震えて、まるで金縛りのような状態になって代えることができませんでした。あの心境はいまだに分かりません。そうしているうちにアメリカに1点を取られてしまい、そこで慌ててピッチャーを交代しました。

そして8回の裏、レフトの選手がフライを取ったあとに転んでしまってグラブからボールが落ち……サヨナラ負けでした。試合後、レフトの選手は更衣室でトイレに入ったまま出てきません。そこで私は、いつもと同じように大声で怒鳴りました。「いつまでも泣くな！　お前のエラーで負けたんだろう」。するとその瞬間、選手たち全員が「この子のエラーじゃない！　みんなのエラーだ」と。私は選手全員に説教されたのです。閉会式、私は一人で更衣室に残って反省していました。もしあのとき、私がピッチャーを交代していたら金メダルを取れたと思います……リーダー失格ですね。でも、本当に家族のようないチームをつくったと思っています。



アテネ五輪ソフトボール準決勝で中国を完封した上野由岐子投手をねぎらう宇津木監督（写真提供／時事）

そして、次のアテネで金メダルを目指すため、再び猛練習をして臨んだのですが……結果は銅メダルでした。すべて私の責任です。

2008年の北京オリンピックは、私に代わる監督が発表され、私は自分の夢をピッチャーでエースである上野由岐子や三科真澄ら同じ実業団のチームで頑張ってきた日本代表選手たちに託し、解説者としてオリンピックに行きました。

大会中、上野が「自分の思うようにいかない、辞めて日本に帰りたい」と相談してきたとき、「この4年間、何のために投げてきた？　何のために練習してきた？　勝つためでしょう？　だから負けちゃダメ、逃げちゃダメだよ」と言い聞かせ、上野は傷ついた体で頑張ってくれました。そうしてご存じのとおり、日本は悲願の金メダルを取り、ソフトボールをメジャーにしたいという私の夢をかなえてくれたのです。

ソフトボールは一人ではできませんし、一人ひとりが適材適所の中で与えられた仕事をしないと勝てません。人をどう生かすかを考えるのは、リーダーの仕事です。一人ひとりと会話をして、向き合って、クセを見て、組織の中で生かす。人を育てなければいいチーム、企業は成り立たないと思います。

私が総監督を務める東京国際大学のソフトボール部は、エリート選手の集まりではありませんが、一昨年の全日本大学女子ソフトボール大会で優勝を果たしました。努力は裏切らない、たとえ弱いチーム、下手な選手であっても、真剣に練習を続けると結果が出るということを実証したのだと思います。

本稿は、2015年9月15日に行われた埼玉講演会の要旨を編集室でまとめたものです（文責／編集室）。